

日本全国

ヨットクラブ探訪記

文・写真＝安藤 健（本誌）
text & photos by Ken Ando (Kazi)



第7回 メンバーの絆の秘密は、40年の歴史にあり

MYOC

諸磯ヨットオーナーズクラブ

ヨットを愛する紳士淑女たちの集まりである、ヨットクラブ。

マリーナが変わればヨットクラブのカラーも変わる。

各水域の活況の秘訣を探るべく、全国津々浦々のヨットクラブを探訪します。

今回は、日本のヨット文化の中心を長く担ってきた三浦半島へ。

40年の伝統が息づく、アットホームな諸磯ヨットオーナーズクラブです。

ロゴマークには「SINCE 1973」とあるが、創立年には諸説あるらしく、メンバーもさほど気に留めていない。そんなおらかなクラブである



9月7日に開催された、恒例のイベントである夏祭りには、メンバーやその家族など200人以上が参加した



三浦半島の南西端近く、緑に包まれた深い入江が諸磯湾だ。現在、MYOCに所属する99艇が海上係留している。アンカーの設置や係留に関する長年のノウハウも豊富で、今年の台風18号と19号も無事にやり過ごした

地元漁業者との共存

まず最初にお断りさせていただきたい。今回紹介する「諸磯ヨットオーナーズクラブ (MYOC)」は、筆者が二十数年前に、人生で初めて触れたヨットが所属していたクラブであり、その拠点である諸磯湾 (神奈川県三浦市三崎町)こそは、青春時代の大部分を過ごした場所であるということ……。であるからして、多少の身びいきが出てしまうことはお許しいただければ幸いだ。

MYOCを語る上で、諸磯湾というすば

らしいロケーションを語らずして始めることはできない。深い緑に包まれた静かな空間は、近隣の油壺湾^{あぶらつぼ}、小網代湾^{こあじろ}と並び、「天然の良港」と呼ぶにふさわしい。この諸磯湾に海上係留している人たちが組織しているクラブが、MYOCである。

「漁港の一部に艇を水置きしているせいか、諸磯は自主管理泊地だと思われることが多いのですが、実際はそうではありません。ここに艇を置いているオーナーは、県から係留許可を受け、全員がMYOCに所属していて、クラブとして漁協 (諸磯漁業協同組合) と一括管理契約を結んでいます」(小平忠昭MYOC会長)

ユーザーは県に停係泊料を支払う一方で、漁協に艇体管理委託料を支払っている。「自主管理」という形を取ると、基本的にはユーザー自身が、アンカーの設置やその管理など、なんでもやらなければいけない。しかし、MYOCの場合は、安全係留を第一のモットーとし、漁協が施設の管理を行い、漁協から業務を委託された管理人も常駐している。

「管理人さんは、地元の海をよく知った方が続いていて、非常に心強い。例えば、

MYOCのオリジナルグッズの数々。左手前のピンバッジは、今年11月22日に開催される40周年記念式典のために作られたものだ



湾奥の一角に立つ、MYOCのクラブハウス。1階には管理人の本間功一さんが常駐しており、出航届をここで出す。2階はオーナーズルームになっている

CLUB data

MYOC 諸磯ヨットオーナーズ クラブ

- 創立年: 1973年
- 会長: 小平忠昭氏
- 所属艇: 99艇
- クラブ会費: 54,000円 (艇体管理委託料、停係泊料など別)



会長: 小平忠昭氏

主要イベント

クラブレース (年11回。伊東レース、保田レース含む)、チャリティーセーリング (5月)、夏祭り (9月)、忘年会 (12月)

事務局

E-mail: sailor@jcom.ne.jp (副会長 / シェスタ) 松崎 健)



右端にテンドーが2隻浮かんでいるのは、出航中のヨットの停泊場所。40年の歴史を持つこのクラブには、単独世界一周レースで知られる「オケラ」の故多田雄幸氏も所属していた



夏祭りの当日、体験レースの参加艇が、ワイワイガヤガヤと出航の準備中。隣のフネともこの間隔、「MYOCは長屋暮らしと同じなんだよ(笑)」と言っていたが、なんとアットホームな風景だ



海上係留のMYOCで、愛艇への足はテンダー。オール2本で漕ぐのではなく、佐渡島のたらい舟のように、1本の櫂(かい)を器用に使いこなすのが諸磯スタイルだ



基本的にはクラブ所有のテンダーで移動するが、ときには管理人の本間さんが、船外機付きのボートでデリバリーサービスしてくれる

係留するためのアンカーの打ち替えや調整なんかも、海のプロである、管理人さんをはじめ漁協の皆さんがすべてやってくださいます。管理は漁協にお願いし、運営はクラブの理事会を中心に行うというのが、MYOCのスタイルです」(小平さん)

フィッシャーナなど、漁港の一部がプレジャーボートに開放される例は、今でこそ全国でも多く見られるが、諸磯湾の例は、そのはしりといえるかもしれない。MYOCは、諸磯湾に「公式に」ヨットが置かれるようになったのときを同じくして、その歴史をスタートさせた。1973年(昭和48年)まで遡る。

当時は日本でヨットが急速に人気を集め始めた時代で、それに伴って、泊地の問題も各地で起こり始めていた。諸磯湾にも、何隻かのヨットが泊まっていたが、県から退去勧告が出てしまったという。そ

れを契機に、当時のNORC諸磯フリートを母体に、諸磯ヨット協議会が結成され、翌1974年には諸磯ヨットオーナーズクラブへと発展し、県や漁協との折衝に当たった。このとき、クラブには約150艇が参加したそう。メンバーの皆さんの努力によって、1976年には、漁協との間にクラブ艇管理契約が締結された。

「1979年には、念願のクラブハウスが完成するなど、いろいろなことがありました。今年で40周年を迎えましたが、やはり地元の漁業者の皆さんの理解があったことは大きいと思います」(小平さん)

強風の体験レース

今回の取材を実施したのは、9月7日(日)のこと。クラブの年中行事の一つである「夏祭り」が行われる日だ。例年は諸磯漁港船揚場で開催しているが、今年は創立40周年の年とあって、場所を三崎港の多目的スペース「うらり」に移して盛大に行うという。午前中はクラブレースをやるというので、本部艇の〈オーディン〉(ヤマハ33S)に乗せてもらった。

「クラブレースは、年間11回行っています。諸磯沖をスタートして、城ヶ島南西沖ブイを回ってくるのが基本的なパターンですが、泊まりがけの保田レースや伊東レースもあって、ワイワイ楽しくやっています。これとは別に、夏祭りの日には、ゲストにも乗ってもらおうという趣旨で体験レースを実施しています」と話すのは、レース委員長を務める〈オーディン〉の若原英己さん。レースの本部艇は、毎回当番制だ。

この日は、夏祭りの準備の都合などか



クラブレースの運営も、メンバーで分担して行っている。取材当日は〈オーディン〉が本部艇、左写真の〈サニークイーン〉がマーク打ちを担当した

所属艇が出航時にプロペラにロープを絡めしまうと、すぐに管理人の本間さんが潜って解消。潜水士の免許も持っているというが、漁協に管理を委託しているクラブならではのサービスだ



〈ダフネレティシア〉の皆さんは、レースのほうはDNS。「必ず誌面に載せてよ」と念を押されたので、しっかり約束を果たさせていただきました(笑)



ベテランメンバーがそろう〈八洲IV〉(スプリント108)。雨交じりの強風コンディションでも、皆さん余裕のスマイル



本部艇を担当した〈オーディン〉(ヤマハ33S)の船上。アンカーアップの作業など、まったくお手伝いできず、すみませんでした



風速 10m/s 近くのコンディションとなり、体験レースはサバイバルなムードが漂った。大きくヒールする〈ワイルドズー〉(ファースト310)



取材当日の体験レースを制したのは、〈ハコバコ〉(オカザキ 401)。クラブの副会長を務める本間武男さんほか数人の共同オーナーで活動している



相模湾では古くからレーサーとして活動してきた〈アズサ〉(シーム33)。その歴史は、MYOC 創立以前にまで遡るという



こちらも老舗中の老舗の一艇、〈陽焰〉(スイング31)。オーナーの川久保史朗さんを筆頭に、現在も熱心に活動している

ら、エントリーはちょっと少なめの9艇。時折、雨が降りつける上に、風は10m/s近くも吹いている。それより、コースの短さにはびっくりした。ソーセージコースで、片道1マイルもないくらいの距離なのだ。

「今日のテーマは『体験』。ですから、ちゃんとスタートしてマークを回ってきて、レースを体験してほしいんです。うちのクラブはベテランが多いので、安全面もきちんとしていますし、運営する側も楽ですよ」(若原さん)

雨交じりの強風下、ゲストにとって思い出したくない「体験」にならなければいいとも思ったが、レース後に泊地に戻ると、意外や皆さん笑顔がこぼれていた。

家族同然の長い付き合い

ホームポートに帰着し、今度は夏祭り会場へ。この行事はすべて、実行委員長の〈シャンドメール〉塚原利夫さんを中心とした、クラブのメンバーの手作りによるものだ。

なんといっても注目は、各艇が趣向を凝らした出店の数々。メニューのほとんどが定番化していて、今年もまたお相伴にあずかると、楽しみにする参加者も多い。

祭りが始まるころには、屋内と屋外の会場は大勢の参加者であふれ返った。118ページの写真を見れば分かると思うが、その数、優に200人を超えている。

ふと、参加者を見ていて感じたことがある。家族ぐるみの参加が、実に多いのだ。年齢層も幅広い。なんともファミリーライク



オーナーズルームには、クラブの歴史を物語る、いろいろなものが飾られていた。左は、1996年に「チーム諸磯」で参加したケンウッドカップのレリーフ



上：チャリティーセーリングに招かれた子供たちが、お礼に送ってくれた寄せ書き。40回の開催を通じて、多くの子供たちにヨットと海を体験してもらっている
下：レースが終わると、クラブハウス2階の一室で、すみやかにレース成績を算出。メンバーの皆さんも手慣れたもので、肅々と作業が進んでいった



夏祭り会場に飾られていた横断幕。天気の良い日には、諸磯湾湾口の先に富士山を拝むことができる。写真を撮ったり、絵を描いたりするスポットとしても人気が高い



夏祭り会場では、とにかく家族ぐるみでの参加が目立った。このアットホームな雰囲気は、まさに「諸磯ファミリー」とでもいったらいいだろうか

というか、アットホームなMYOCらしい雰囲気である。

ここで、ほかのヨットクラブとは異なる、MYOCならではの特徴（事情）にも触れたい。それは、クラブの発足以来、基本的にメンバーがまったく変わっていないということだ（減ってはいる）。県のルールの関係で、新規に保管艇を増やすことがで



三崎港「うらり」の2階のホールが、今年の夏祭りの会場。メンバーによる出店が並び、頭上には所属艇の名前が書かれたちょうちんが連なる。祭りの気分が高まってくる

きなかったため、40年前のメンバーが、そのまま今も同じメンバーなのである。一言に40年とはいうが、その付き合いは家族よりも長く、家族よりも濃いものであるに違いない。

「このクラブがスタートした40年前にヨットをやっていた連中、みんなあのころは20代、30代でした。当時はみんなお金もないから、必然的に共同オーナーの数も非常に多い。やがて、メンバーに子供が生まれたり、その子供が大人になって孫を連れてきたり、そんな年になってしまいました（笑）。これからは、もっと若いメンバーを増やしていくことが、うちのクラブの大きな課題ですね」（本間武男 MYOC 副会長）

夏祭りの場は、クラブのイベントというよりは、まるで盆や正月に親戚一同が集まったような感じ。盆休みに実家に帰り、地元の祭りを楽しんでいる気持ちになった。

濃い関係だからできる活動

現在、MYOCには99艇が所属している。創立時から50艇ほど数が減っているのは、新規に係留艇を増やすことができないという理由がある。最近はブルーウォーター派が大勢を占めるようになっていくが、以前は熱心にレース活動を行う艇も多かったようだ。

「1996年には、MYOCの有志で『チーム諸磯』を結成し、ハワイで開かれていたケ



MYOC理事、〈ウレカ〉の田口秀樹さん（右端）たちは、パーズやワッペン、ステッカーなど、オリジナルグッズを販売



NHKドラマ「あまちゃん」の舞台は、北三陸だったような……。〈つるぎ〉の「諸磯の海女」たちが作るオリジナルカクテルは大人気



各艇が趣向を凝らした出店をチェック!

毎回焼き物を提供し、大人気を集める〈アズサ〉の今年の材料は高級牛肉。筆者もお裾分けしていただいたが、これが絶品だった

長年、夏祭りの実行委員長を務める〈シャンドメール〉の塚原利夫さん（中央）と、メンバーの皆さん。MYOCのTシャツの販売を担当



今年は屋内に出店が設置されるとあって、いつものメニューを変更して、ポップコーンを手がけた〈モラモラ〉の皆さん



〈竜丸丸〉の皆さんが提供するの、アツアツのおでん。ダシがしっかり染み込んでいる具材は、メニューも豊富で大満足



1回目のビンゴの大当たりは、管理人の本間さん(左)。賞品の「ホテルグランドハイアットのランチ券2人分」を手にした本間さんに、会場から「いつもありがとう」の声が



体験レース優勝の〈パゴパゴ〉の皆さんには、副賞として「某有名チーム」のグッズが送られた。本部艇〈オーディン〉が提供した、なんと無料な計らい

ンウッドカップにも参加しました。休みをやりくりして、交代でレースに出場したものです。家族や仲間も大勢ハワイに駆けつけて、そりゃあ楽しかったですよ(小平さん)

その後も、キングズカップ(タイ)やランカウイレガッタ(マレーシア)にも有志で参戦したり、仲間を募ってクロアチアでチャーターヨットを楽しむなど、メンバーたちの活動の場は世界にまたがる。

そして、夏祭りと並んで欠かせない大事な行事が、毎年5月に実施している「チャリティーセーリング」だ。これは、神奈川県内の児童養護施設の子供たちを招き、セーリングを体験してもらおうというもの。クラブの創立当時から実施している取り組みで、今年で40回目を迎えた。

「チャリティーセーリングは、毎年、子供たちに大好評です。例えば、今年は185人の子供たちが参加し、付き添いや受け入れ側も含めたら、330人以上が参加したくらいの大イベント。クラブからは38艇の協力艇が出ましたが、クラブレースより全然多い(笑)。クラブを挙げて取り組んでいる行事で、神奈川県社会福祉協議会さんから、節目の年ごとに感謝状もいただいています(小平さん)

自分たちは遊びでヨットに乗っているけれども、少しでも社会に対して貢献したい。そんな思いから、約40年も前から地道に

夏祭りが最高に盛り上がった、大ビンゴ大会。司会進行役を務める〈シャンドメール〉の塚原利夫さん(右端)の絶妙なトークに、そこかしこで笑いが起こる



生バンドの演奏に、エーサーの舞踊……。気が付くと、観客も演者も入り乱れて、何がなんだかよく分からないダンスタイムが始まった

行っている活動が、たくさんの子供たちの思い出になっている。クラブハウスで拝見したお礼の寄せ書きからは、子供たちの感動が伝わってきた。

「40年前と現在とでは、ヨットを取り巻く環境も変わりました。そんななか、例えばオーナー(メンバー)の追加が認可されるようになったことなど、泊地の利用に関するルールも変化しつつあります。僕らは恵まれた時代に育ったのかもしれないけれども、若い人たちにも、ヨットを持つという魅力を知ってほしい。クラブのメンバーはみんな年を取ってきてしまったけれども、若い人たちにどんどん来ていただいて、クラブを活性化したいのです(小平さん)

筆者が初めて諸磯でヨットに乗ってから、仕事柄もあって、ずいぶんいろいろな場所でセーリングを楽しんだ。それでもやはり、諸磯以上の場所はないと思う。共用テンダーの使い方が悪かったり、静かな湾内で大騒ぎしたりして、先輩メンバー諸氏にはよく叱られたものだが、それも今はよい思い出の一つ。自分がヨットを覚えた場所とクラブに対して、やっぱり今でも誇りを持っている。

ほら、このとおり

年に一度の夏祭り、生ビールの消費量も半端じゃない。祭りが終わるころには、空いた樽が積み上がっていた



MYOCは、慶応大学、東京都市大学、明治学院大学と、学生の艇も所属する、珍しいクラブでもある。10月に海外遠征する明治学院大学の学生が、ここぞとばかりに寄付を募っていた

2014年度イベントスケジュール

- 4月20日(日) クラブレース第1戦
- 5月11日(日) クラブレース第2戦
- 5月18日(日) チャリティーセーリング
- 6月7日(土) 伊東レース(クラブレース第3戦)
- 6月22日(日) クラブレース第4戦
- 7月13日(日) クラブレース第5戦
- 9月7日(日) 夏祭り
- 9月28日(日) クラブレース第6戦
- 10月12日(日) 保田レース(クラブレース第7戦)
- 10月26日(日) クラブレース第8戦
- 11月9日(日) クラブレース第9戦
- 11月23日(日) クラブレース第10戦
- 12月7日(日) クラブレース第11戦
- 12月17日(水) 忘年会